

「野球の楽しさを伝えられるアナウンサーになりたい」

入門先 日本放送協会（NHK）富山放送局

期日 令和3年7月21日、8月6日

1 NHK 富山放送局（7月21日）

NHK 富山放送局に伺い、同局の柴田拓正アナウンサーにお話を聞かせていただいた。以下のようなお話を聞き、アナウンサーの仕事について、大変なところや楽しいところなどについて詳しく知ることができた。



- ・アナウンサーの仕事はニュースを読むだけではなく、取材をすることもあれば希望すれば編集することもある
 - 仕事が多様で楽しく飽きない
- ・5分間のニュースでもいろいろな話題があり、よくわからないニュースもある
 - わからないことを下調べすることが大切
- ・ただ、原稿の到着が遅いと下調べできないこともあるため、普段からいろいろなニュースを吸収して勉強していくことが大切
- ・ニュースを読むときは「伝わりやすさ」と「時間に間に合わせる」の両立が難しいが、そのドキドキが楽しい部分でもある

- ・野球を含むスポーツの実況をするときには選手のデータ集めを大切にし、できるだけ自分で資料を打ち込み、内容をインプットする
 - インプットした内容をまた取材に生かせる
 - 試合でどんなことが起こっても良い実況ができる
- ・スポーツの実況は原稿がないのでニュースの何倍も下調べが大切
- ・ただ、やはり、自分が楽しみ、感情を大切にすることが一番大事
 - ↓
 - 「人が人に伝える」という事はなくならないし、なくしてはいけない
- ・たとえ咳が出たり、かんだりしても、準備をした上でそうってしまったなら、あまり考え込まず「伝えることを楽しむ」ことの方を大切にす
- ・アナウンサーになるためには、いろいろな人と話し、いろいろな考え方を聞き、人と関わっていくことが大切
 - やりたいことや将来の夢は、周囲の人にもどんどん伝えることで縁を生み出していくことができるので、それを大切にしてい

柴田アナウンサーのお話の後、スタジオを見学させていただくことができた。

ニュースを見ているとカメラは1台だけだと思っていたが、ものすごい数のカメラが置いてあつてとても圧巻だった。ライトもたくさんあって、本番では暑いくらいとのことだった。



スタジオには約10日後に行われる全国高等学校野球選手権富山大会の決勝戦の実況に使う予定の機材が準備されていた。一試合の実況に、こんなに多くの機材を準備するというにもとても驚かされた。



ラジオのスタジオでは、実際に椅子に座らせて頂き、アナウンサー気分を味わうことができた。



また、調整室も見学させていただくことができた。いろいろな大きさのボタンがとてまたくさんあり、学校の放送室の少しのボタンでも操るのが大変なのに、これを操れる人は凄いなと思った。

〈まとめ〉

全体を通して、普段テレビではわからないようなアナウンサーの見えない努力をすごく感じ、改めてその凄さを感じることができた。柴田アナウンサーがおっしゃっていた、人との関わりをもっと大切にしようというお話はすごく心に残った。また、「伝えることを楽しむ」ことが自分に欠けていたと分かった。今回聞かせていただいたお話を、今やっている学校での広報委員会の仕事にも生かしていきたいと思った。



2 リモート入門(8月6日)

柴田アナウンサーが実況をされた全国高校野球選手権富山大会の決勝戦のオンエアの視聴後、柴田アナウンサーとリモートで通話させていただく機会をいただいた。



まずは柴田アナウンサーから決勝戦までのスケジュールや、実況に使っていた資料などを見せていただきながら、準備の時や当日の状況についてお話を伺った。

資料については、1回目の入門の時も見せていただいていたが、その何倍も資料があってとてもびっくりした。また、実際に実況する1週間前から実況する球場を訪れて準備をすることもわかった。そのような準備の上に、生放送にもかかわらず、とてもわかりやすい実況が成り立ち、視聴者が安心して決勝戦を見ることができるといったことがわかった。

その後、柴田アナウンサーへの質疑応答の時間を設けていただいた。決勝戦を見ていてわからなかった部分や、自分が放送するとき悩んでいることについてなど、様々な質問に一つ一つ丁寧に答えていただいた。特に「今、目の前にあること一つ一つに向かって全力で取り組むことによって、それが絶対に将来につながってくる」というエールをもらい、とても心強く感じた。



(実際の実況席の写真を画面上で見せていただいた様子)

〈まとめ〉

1 回目に入門させていただいた時、実況をするときの準備の仕方などは聞いており、決勝戦での工夫もある程度わかっていたつもりだったが、自分の想像していたよりも何倍も、1つの実況のために工夫や準備がされていることがわかった。これからはスポーツ番組はもちろん、ニュースなどもアナウンサーの方に感謝をしながら見るようにしたいと感じた。そして、学校での広報委員会の仕事でも、ただ読むだけでなく自分から準備をしたり、工夫をしたりするようにしていきたい。

今回の入門を通し、アナウンサーという職業に対しての憧れがますます強くなった。これからは、柴田アナウンサーからもらったエールを胸に、将来の夢へ向かって日常生活でも色々なことに全力で取り組んでいこうと思う。